

1サムエル記22-24章 「柔和な者を守る神」

アウトライン

1A 加えられる仲間 22

1B 勇士たち 1-5

2B サウルの虐殺 6-23

1C 自己憐憫 6-10

2C 神を恐れぬ男 11-19

3C 逃れた祭司 20-23

2A 神に守られる逃亡 23

1B 主に伺うダビデ 1-14

1C 民の救い 1-5

2C 民の裏切り 6-14

2B 友の励まし 15-18

3B 摂理による守り 19-29

3A 憐れみの勝利 24

1B 敢えて控える復讐 1-7

2B 穏やかな叱責 8-15

3B 涙の悔恨 16-22

本文

サムエル記第一 22 章を開いてください。私たちは、ダビデがサウルから逃げる人生が始まったところで前回の学びが終わりました。ヨナタンと契約を交わしてから彼は逃げましたが、初めに行ったところは祭司アヒメレクのところです。そこでパンを受け取り、またゴリヤテの剣を受け取りました。それからペリシテ人の王アキシユの領土に行きましたが、そこで捕えられてしまいました。けれども、気違いの装いをして難を逃れます。

1A 加えられる仲間 22

1B 勇士たち 1-5

22:1 **ダビデはそこを去って、アドラムのほら穴に避難した。彼の兄弟たちや、彼の父の家のみなのが、これを聞いて、そのダビデのところの下って来た。**

ダビデは行き場所を失いました。祭司のところに行きましたが、そこにエドム人ドエグがいました。そして敵陣のところに行けばもちろん危険です。そこで、彼は洞穴に避難しました。これから彼の逃げ場の多くが洞穴になります。彼の詩篇の中に数多く、「主が避け所であり、岩である。」という

信仰告白があります。例えば、94 篇 22 節ですが「しかし主は、わがとりでとなり、わが神は、わが避け所の岩となられました。」岩場に隠れています、主こそが岩場であるという告白です。

そして「アドラム」ですが、これはかつてゴリヤテに対峙したエラの谷の近くにあります。アキシユのガテからも近いです。そこにダビデの家族がやって来ました。サウルを怒らせたのが、ヨナタンが食事の席で、「ダビデが、自分の氏族がいけにえを捧げるから、行かせてください、と頼んだ。」というところから始まっていたことを思い出してください(20:29)。命を狙うのはダビデ本人だけでなく、ダビデの家族もそうなのです。彼らはどこに行っても危険ですから、安全なのはダビデのところだけです。

22:2 また、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。こうして、約四百人の者が彼とともにいるようになった。

家族だけでなく、兵士たちもダビデのところに集まってきました。後に彼らがダビデの勇士となり、ダビデがイスラエルの王となった時に彼の傍らにいる側近となっていきます。彼らの姿が興味深いです。「困窮している者、負債のある者、不満のある者たち」です。一言でまとめれば、サウルの国において困っている人、満足していない人々であります。

ここで思い出すのは、イエス様の弟子たちです。彼らに対してイエス様は、ご自身が地上で王とされる時に、彼らが十二の座に着くことを約束されました。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。(マタイ 19:28)」けれども、弟子たちは漁師であり、元取税人であり、また元熱心党员であり、決して社会的に高い地位にいた者たちではありませんでした。共通しているのは、「今のままではいけない、神の御国を求めたい。」という思いでした。イエス様は、「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。(マタイ 5:6)」と言われましたが、その渴きを持っている者たちです。

私たちキリスト者も、キリストと共に座に着くことを将来約束されていますが、それはこの世がこのままではいけないと思っているからです。キリスト者は、悪の圧制から、愛する御子の支配の中に移されたことを教えられています。「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:13)」

22:3 ダビデはそこからモアブのミツパに行き、モアブの王に言った。「神が私にどんなことをされるかわかるまで、どうか、私の父と母とを出て来させて、あなたがたといっしょにおらせてください。」22:4 こうしてダビデが両親をモアブの王の前に連れて来たので、両親は、ダビデが要害にいる間、王のもとに住んだ。

ダビデは年老いている両親を、モアブの王にゆだねています。思い出せますか、父エッサイの祖母はモアブ人ルツです。この縁戚関係を使って委ねたのです。そしてダビデは「要害」にいました。要害はおそらくマサダではないか、とも言われます。死海のほとりにありますが、乾季には死海は真ん中のところの浅瀬が涸いて二つに分かれます。陸続きになっていたのも、そのままモアブを行き来ができたのでしょう。

22:5 そのころ、預言者ガドはダビデに言った。「この要害にとどまっていなくて、さあ、ユダの地に帰りなさい。」そこでダビデは出て、ハレテの森へ行った。

主は不思議な方です。ご自分がお語りになりたいときに、預言者を送られて励ましを与えられます。教会でも同じですね、主はある兄弟を私たちに送られて、慰め、勧め、励まし、徳を高める言葉を残してくれます。そしてその励ましは、「要害にとどまるのではなく、ユダの地に帰りなさい」ということですが、なぜでしょうか？外国に近いところにいたほうが安全なのです。ユダの地に帰れば危険です。それでも主は、ダビデに与えられたイスラエルの国に留まっていほしいと願われたのです。次の章で、ケイラにいる人々がペリシテ人に襲われるところを救い出します。たとえ危険があっても、主が与えられた約束の地に留まっていること、そして主に与えられた使命を果たすことを願っておられるのです。

私たちも同じです。サウルがダビデを追うように、私たちが信仰の遺産を持っていれば、それを切り崩そうとする悪魔の勢力に私たちはすぐに対面します。この世に戻ったほうがよほど楽です。けれども、それは自分の肉では楽だと思っていますが、霊では「それは違う」と分かっています。この地は主が再び戻って来られて御国が立てられます。たとえ戦いがあっても、その御国を求めて神の領域の中に、また神の使命の中に留まっていることのほうが幸せです。

そしてダビデは、エルサレムの南にある「ハレテの森」に行きました。

2B サウルの虐殺 6-23

1C 自己憐憫 6-10

22:6 サウルは、ダビデおよび彼とともにいる者たちが見つかった、ということを知った。そのとき、サウルはギブアにある高台の柳の木の下で、槍を手にしてすわっていた。彼の家来たちはみな、彼のそばに立っていた。

「ギブア」はサウルの故郷です。そして、「高台」とありますが今でもギブアには高い丘があります。そこで「柳の木の下」で「槍」を手にして座っています。これは日本でいうならば本陣の姿です。

22:7 サウルは、そばに立っている家来たちに言った。「聞け。ベニヤミン人。エッサイの子が、おまえたち全部に畑やぶどう畑をくれ、おまえたち全部を千人隊の長、百人隊の長にするであろう

か。

サウルは自分の取巻きを自分の部族であるベニヤミンにしていました。そして、ダビデを敵対視し「エッサイの子」と呼び、そして報酬を彼が与えられるだろうかと言って自分に対する忠誠心を呼び起こそうとしています。

22:8 それなのに、おまえたちはみな、私に謀反を企てている。きょうのように、息子がエッサイの子と契約を結んだことも私の耳に入れず、息子が私のあのしもべを私に、はむかわせるようにしたこと、私の耳に入れず、だれも私のことを思って心を痛めない。」

被害妄想と自己憐憫の塊です。ヨナタンが契約を結んでいますが、ヨナタンが父にどれだけ忠実であったか知りません。家来たちもそれを分かっています。心を痛めているのはヨナタンであり、サウルではないのです。彼の発言の特徴は「私」という言葉が連発していることです。「私の耳」「私もあのしもべ」「私に」「私のことを思って」…であります。こうなった時は危険信号です。

22:9 すると、サウルの家来のそばに立っていたエドム人ドエグが答えて言った。「私は、エッサイの子が、ノブのアヒブの子アヒメレクのところに来たのを見ました。22:10 アヒメレクは彼のために主に伺って、彼に食料を与え、ペリシテ人ゴリヤテの剣も与えました。」

覚えていますか、ダビデがアヒメレクの所に行った時に、ドエグが「主の前に引き止められていた(21:7)」とありました。彼が「エドム人」であることに注目してください。エドム人であるからといって、そのまま悪人であると結びつけてはいけません。けれども、聖書がドエグのことを必ずエドム人という前置きを置いているというのは、エドムに対する神の怒りを思い出させるためです。

エドムに対して、エゼキエルはこう預言しました。「おまえはいつまでも敵意を抱き、イスラエル人が災難に会うとき、彼らの最後の刑罰の時、彼らを剣に渡した。(エゼキエル 35:5)」ヤコブがだました時にエサウがヤコブを恨み殺したいと思ったあの出来事が、後のエドム人の特徴となっていきます。実に、イスラエルが災難に会っている時にエドムは助けるどころから、敵に引き渡すことを、バビロン捕囚の時に行ないました。私たちが、自分の敵に恨みを抱かないこと、また、敵であっても善を行なうことの戒めとして、エドム人がいます。

2C 神を恐れぬ男 11-19

22:11 そこで王は人をやって、祭司アヒブの子アヒメレクと、彼の父の家の者全部、すなわち、ノブにいる祭司たちを呼び寄せたので、彼らはみな、王のところに来た。22:12 サウルは言った。「聞け。アヒブの息子。」彼は答えた。「はい、王さま、ここにおります。」22:13 サウルは彼に言った。「おまえとエッサイの子は、なぜ私に謀反を企てるのか。おまえは彼にパンと剣を与え、彼がきょうあるように、私に、はむかうために彼のために神に伺ったりしている。」

何を言っているのですか、と言いたいですね。はむかっているのはダビデではなく、サウル自身です。これを被害妄想またはパラノイアと言います。

22:14 アヒメレクは王に答えて言った。「あなたの家来のうち、ダビデほど忠実な者が、ほかにだれかいるでしょうか。ダビデは王の婿であり、あなたの護衛の長であり、あなたの家では尊敬されているではありませんか。22:15 私が彼のために神に伺うのは、きょうに始まったことでしょうか。決して、決して。王さま。私や、私の父の家の者全部に汚名を着せないでください。しもべは、この事件については、いっさい知らないのですから。」

アヒメレクは、清い良心を保っていました。彼は何も悪いことをしていませんし、サウルとダビデの間のことも何も知りませんでした。

22:16 しかし王は言った。「アヒメレク。おまえは必ず死ななければならない。おまえも、おまえの父の家の者全部もだ。」22:17 それから、王はそばに立っていた近衛兵たちに言った。「近寄って、主の祭司たちを殺せ。彼らはダビデにくみし、彼が逃げているのを知りながら、それを私の耳に入れなかったからだ。」しかし王の家来たちは、主の祭司たちに手を出して撃ちかかろうとはしなかった。

考えてみてください、サウルはいつも全焼のいけにえを捧げることに熱心でした。しかし、ここに彼の本音が暴かれています。自分自身のためにいけにえを捧げていたのです。主を恐れて捧げていたのであれば、だれが主の祭司を虐殺しようとするでしょうか？近衛兵たちの方がまっとうな良心を持っています。「**主の祭司**」たちです。王と同じように主に油注がれた者たちです。誰が手を下すことができるでしょうか？もし、これが実行に移されないのであれば、サウルの精神錯乱の中でも妄言で終わらせることができたでしょう。ところが実行に移す者が出てきてしまいます。

22:18 それで王はドエグに言った。「おまえが近寄って祭司たちに撃ちかかれ。」そこでエドム人ドエグが近寄って、祭司たちに撃ちかかった。その日、彼は八十五人を殺した。それぞれ垂麻布のエポデを着ていた人であった。22:19 彼は祭司の町ノブを、男も女も、子どもも乳飲み子までも、剣の刃で打った。牛もろばも羊も、剣の刃で打った。

恐ろしいです、実に恐ろしいです。男だけでなく女も乳飲み子さえも殺していきます。

3C 逃れた祭司 20-23

22:20 ところが、アヒトブの子アヒメレクの息子のエブヤタルという名の人が、ひとりのがれてダビデのところに逃げて来た。22:21 エブヤタルはダビデに、サウルが主の祭司たちを虐殺したことを告げた。22:22 ダビデはエブヤタルに言った。「私はあの日、エドム人ドエグがあそこにいたので、あれがきっとサウルに知らせると思っていた。私が、あなたの父の家の者全部の死を引き起こし

ただ。

主は真実な方です。祭司の家が根絶やしにならぬよう、一人が逃げるように守ってくださいました。そしてダビデにその全てを告げます。ダビデは柔らかい心を持っています、自分自身にすべての責任を負わせています。

この時のダビデの心境を、彼は詩篇 52 篇にしたためています。読んでみましょうか？

52 指揮者のために。ダビデのマスキール。エドム人ドエグがサウルのもとに来て、彼に告げて「ダビデがアヒメレクの家に来た。」と言ったときに 52:1 なぜ、おまえは悪を誇るのか。勇士よ。神の恵みは、いつも、あるのだ。52:2 欺く者よ。おまえの舌は破滅を図っている。さながら鋭い刃物のようだ。52:3 おまえは、善よりも悪を、義を語るよりも偽りを愛している。セラ 52:4 欺きの舌よ。おまえはあらゆるごまかしのことばを愛している。

ダビデは怒りました。ドエグの偽りに対して怒りました。ドエグが告げたのは、本当のことでした。ダビデがここで「偽り」と言っているのは、ダビデの悪意であります。サウルに対して悪意を抱いていないのに、そのように仕向けたのです。私たちは本当のことを話しても、そこに善意がなければそれは神の目には偽りの罪なのです。

52:5 それゆえ、神はおまえを全く打ち砕き、打ち倒し、おまえを幕屋から引き抜かれる。こうして、生ける者の地から、おまえを根こぎにされる。セラ 52:6 正しい者らは見て、恐れ、彼を笑う。52:7 「見よ。彼こそは、神を力とせず、おのれの豊かな富にたより、おのれの悪に強がる。」

このような悪は神が必ず裁かれることを彼は確信しました。ドエグがサウルから報酬が得られることを期待して行ったこの悪に対して、彼が滅ぼされることを確信しました。ダビデは復讐を神に任せています。

52:8 しかし、この私は、神の家にあるおい茂るオリーブの木のように。私は、世々限りなく、神の恵みに拠り頼む。52:9 私は、とこしえまでも、あなたに感謝します。あなたが、こうしてくださったのですから。私はあなたの聖徒たちの前で、いつくしみ深いあなたの御名を待ち望みます。

恵みに拠り頼む者は、このように栄えます。今、苦境の中にも必ず栄えます。

22:23 私といっしょにいなさい。恐れることはない。私のいのちをねらう者は、あなたのいのちをねらう。しかし私といっしょにいれば、あなたは安全だ。」

ダビデの家族たちと同じです。イスラエルであればどこに行っても彼は付け狙われます。ですか

ら、ダビデのところにいるのが彼にとって安全です。これはキリストにおいても同じです。私たちはこの世のどこにいても安全なところはありません。逃げていくところは必ずキリストご自身です。

そしてこのことによって、ダビデのところには祭司が加えられました。主が確実に、ダビデがイスラエルの王になることの備えを与えておられます。初めは四百人の勇士、次に祭司を与えられました。この祭司エブヤタルが戦いにおいて、神に伺いを立てるのに用いられます。

2A 神に守られる逃亡 23

1B 主に伺うダビデ 1-14

1C 民の救い 1-5

23:1 その後、ダビデに次のような知らせがあった。「今、ペリシテ人がケイラを攻めて、打ち場を略奪しています。」23:2 そこでダビデは主に伺って言った。「私が行って、このペリシテ人を打つべきでしょうか。」主はダビデに仰せられた。「行け。ペリシテ人を打ち、ケイラを救え。」23:3 しかし、ダビデの部下は彼に言った。「ご覧のとおり、私たちは、ここユダにいてさえ、恐れているのに、ケイラのペリシテ人の陣地に向かって行けるでしょうか。」23:4 ダビデはもう一度、主に伺った。すると主は答えて言われた。「さあ、ケイラに下って行け。わたしがペリシテ人をあなたの手へ渡すから。」23:5 ダビデとその部下はケイラに行き、ペリシテ人と戦い、彼らの家畜を連れ去り、ペリシテ人を打って大損害を与えた。こうしてダビデはケイラの住民を救った。

ケイラは、彼らがいるハレテの森よりもさらにペリシテ人寄りのところにあります。そこにペリシテ人が略奪に来ました。「打ち場」というのは脱穀をするところです。収穫を略奪しに来たのです。そして今、ケイラの人々を救いに行くのは部下たちがダビデに言っているように、人間的には無理なことです。サウルの目にすぐに付いてしまいます。けれどもダビデは主に伺いました。二度も伺いました。あらゆることにおいて、私たちは自分で思い込むことなく、主に祈り求める必要があります。自分の悟りではそうだと思っても、それが主の御心であるとは限らないからです。

そして、ダビデはたとえ追われている身であっても、主によってイスラエルの王としてその民を救わなければいけない使命を帯びていました。同じようにキリストは、殺される身であってもご自身の果たすべきメシヤとしての働きを、ユダヤ人指導者に追われながらも、癒しを行ない、御言葉を教えたりなさって使命を果たしていったのです。私たちも同じです。自分が試みに遭っている時に、自分のところにキリストを求める人がやって来たりします。私たちの試練が、主の使命を果たすのに妨げとなることはありません。

2C 民の裏切り 6-14

23:6 アヒメレクの子エブヤタルがケイラのダビデのもとに逃げて来たとき、彼はエポデを携えていた。

主に伺って、主から命令が与えられるのは、エブヤタルのエポデがあったからです。エポデには胸当てのところに、ウリムとトンミムという石が入っています。それが御心を伺うのに用いられたのではないかとされています。

23:7 一方、ダビデがケイラに行ったことがサウルに知らされると、サウルは、「神は彼を私の手に渡された。ダビデはとびらとかんぬきのある町には行って、自分自身を閉じ込めてしまったからだ。」と言った。23:8 そこでサウルは民をみな呼び集め、ケイラへ下って行き、ダビデとその部下を攻めて封じ込めようとした。

案の上、ダビデのしたことはサウルに知られてしまいました。

23:9 ダビデはサウルが自分に害を加えようとしているのを知り、祭司エブヤタルに言った。「エポデを持って来なさい。」23:10 そしてダビデは言った。「イスラエルの神、主よ。あなたのしもべは、サウルがケイラに来て、私のことで、この町を破壊しようとしていることを確かに聞きました。23:11 ケイラの者たちは私を彼の手に引き渡すでしょうか。サウルは、あなたのしもべが聞いたとおりに下って来るでしょうか。イスラエルの神、主よ。どうか、あなたのしもべにお告げください。」主は仰せられた。「彼は下って来る。」23:12 ダビデは言った。「ケイラの者たちは、私と私の部下をサウルの手に引き渡すでしょうか。」主は仰せられた。「彼らは引き渡す。」

ダビデ二度、ケイラの者たちのことを主に伺いました。彼らを引き渡すのか、どうかということをする。自分たちが救ったのだから彼らは匿ってくれるだろう、と思うのが私たちの感情です。けれども、ダビデは伺いました。ここでも同じです、勝手な思い込みをすることはいけないという戒めです。主に御心を伺うのです。そして、ダビデは人々の罪性を知っていました。サウルの剣を恐れて、ダビデを裏切るのは人間であれば十分にあり得ることです。私たちは、もちろん人の最善を願いますが、同時に人の現実の姿に対応していかなければいけません。

23:13 そこでダビデとその部下およそ六百人はすぐに、ケイラから出て行き、そこここと、さまよった。ダビデがケイラからののがれたことがサウルに告げられると、サウルは討伐をやめた。

ダビデの部下がこの時点ですでに四百人から六百人に増えています。

23:14 ダビデは荒野や要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした。サウルはいつもダビデを追ったが、神はダビデをサウルの手には渡さなかった。

「荒野や要害」ではありますが、これはユダの相続地にあるユダの荒野の地域があります。そしてもちろん、ここですばらしいのは神の真実です。「サウルはいつもダビデを追ったが、神はダビデをサウルの手には渡さなかった。」サウルは一時期ダビデを追ったのではなく、「いつも」追っていました。

た。執拗な追跡だったのです。それにも関わらず、「神はダビデをサウルの手に渡さなかった」とあります。私たちはしばしば、ある時に神は助けてくださるが、自分が大変な時は神はどこかに行っていた、と感じてしまいます。いいえ、自分が大変だと思った時こそ、実は神の御手がそこにあったのです。

2B 友の励まし 15-18

23:15 ダビデは、サウルが自分のいのちをねらって出て来たので恐れていた。そのときダビデはジフの荒野のホレシュにいた。

ジフはヘブロンに近く、南東にあります。ユダの荒野の入口のような荒野です。そこで彼は恐れていました。このような時に、先の預言者ガドのように主は人を遣わされます。

23:16 サウルの子ヨナタンは、ホレシュのダビデのところに来て、神の御名によってダビデを力づけた。23:17 彼はダビデに言った。「恐れることはありません。私の父サウルの手があなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。私の父サウルもまた、そうなることを確かに知っているのです。」23:18 こうして、ふたりは主の前で契約を結んだ。ダビデはホレシュにとどまり、ヨナタンは自分の家へ帰った。

なんとヨナタンがやって来てくれました。「神の御名によって力づけた」とありますが、単に力づけたではありません。「大丈夫だよ」と私たちはとかく、人々に行ってしまいますが、大丈夫じゃないから悩んでいるのです！そうではなく、主の御言葉にある約束によって励ますのです。自分がその人を強めるのではないのです、主が強めるのです。

そしてヨナタンは、はっきりとサウルの手から彼が守られることの確証を与えました。なぜなら、ダビデがイスラエルの王となることは神からの言葉だからです。そしてヨナタンは、「あなたの次に立つ者となるでしょう」と自分のことを言っています。これは実現しませんでした。サウルがペリシテ人の手に落ちて死んだ時に、ヨナタンも死んでしまいました。けれどもダビデは、ヨナタンの子孫に恵みを施します。

そして、大事なのはサウル自身も、ダビデが王になることを知っている、ということです。彼はそれを知っているのに、その良心があるのにそれを傷つけてまで反発しているのです。それがサウルの病的なまでの追跡の背後にあったものです。パウロが回心前にキリスト者を迫害しましたが、イエス様はパウロに、「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒 26:14)」と言われました。パウロはこの試みをやめて、主に降参したのですが、サウルはいつまでも戦っていたのです。

そしてヨナタンとダビデは改めて契約を確認して互いに別れました。これで二人の出会いは最後

になります。

3B 摂理による守り 19-29

23:19 さて、ジフ人たちがギブアのサウルのところに上って来て言った。「ダビデは私たちのところに隠れているではありませんか。エシモンの南、ハキラの丘のホレシュにある要害に。23:20 王さま。今、あなたが下って行こうとお思いでしたら、下って来てください。私たちは彼を王の手に渡します。」

ヨナタンが励ましを与えたその直後に、このようにジフ人による裏切りがありました。私たちも同じように、神から励ましと慰めがあった後にすぐそれに反するような出来事が起こることがあります。けれども主は真実です。最後まで読めばわかります。

23:21 サウルは言った。「主の祝福があなたがたにあるように。あなたがたが私のことを思ってくれたからだ。」

サウルは本当に病気でいいですね。このことによって、神の御名を唱えています。まさにみだりに神の名を唱えている罪です。そして、「私のことを思ってくれたからだ」というまさに自分に益になることしか考えていない姿です。

23:22 さあ、行って、もっと確かめてくれ。彼がよく足を運ぶ所と、だれがそこで彼を見たかを、よく調べてくれ。彼は非常に悪賢いとの評判だから。23:23 彼が潜んでいる隠れ場所をみな、よく調べて、確かな知らせを持って、ここに戻って来てくれ。そのとき、私はあなたがたといっしょに行こう。彼がこの地方にいるなら、ユダのすべての分団のうちから彼を捜し出そう。」23:24 こうして彼らはサウルに先立ってジフへ行った。ダビデとその部下はエシモンの南のアラバにあるマオンの荒野にいた。

マオンの荒野は、ジフの荒野の南にあります。ダビデはすでに移動していました。

23:25 サウルとその部下がダビデを捜しに出て来たとき、このことがダビデに知らされたので、彼はマオンの荒野の中で、岩のところに下り、そこにとどまった。サウルはこれを聞き、ダビデを追ってマオンの荒野に来た。23:26 サウルは山の一方の側を進み、ダビデとその部下は山の他の側を進んだ。ダビデは急いでサウルから逃げようとしていた。サウルとその部下が、ダビデとその部下を捕えようと迫って来ていたからである。23:27 そのとき、ひとりの使者がサウルのもとに来て告げた。「急いで来てください。ペリシテ人がこの国に突入して来ました。」23:28 それでサウルはダビデを追うのをやめて帰り、ペリシテ人を迎え撃つために出て行った。こういうわけで、この場所は、「仕切りの岩」と呼ばれた。

間一髪です。ここでも主の介入があります。ペリシテ人が突入してきたということによって、神はダビデを救い出されます。

ところでジフ人たちがサウルに告げ口したことについて、ダビデは詩を残しています。詩篇 54 篇です。

54 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデのマスキール。ジフの人たちが来て、「ダビデはわれらの所に隠れているではないか。」とサウルに言ったとき 54:1 神よ。御名によって、私をお救いください。あなたの権威によって、私を弁護してください。54:2 神よ。私の祈りを聞いてください。私の口のことばに、耳を傾けてください。54:3 見知らぬ者たちが、私に立ち向かい、横暴な者たちが私のいのちを求めます。彼らは自分の前に神を置いていないからです。セラ 54:4 まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえる方です。54:5 神は、私を待ち伏せている者どもにわざわいを報いられます。あなたの真実をもって、彼らを滅ぼしてください。54:6 私は、進んでささげるささげ物をもって、あなたにいけにえをささげます。主よ。いつくしみ深いあなたの御名に、感謝します。54:7 神は、すべての苦難から私を救い出し、私の目が私の敵をながめるようになったからです。

ダビデはドエグと同じように、主ご自身が自分を守ってくださるように、そして主がその敵を滅ぼしてくださるように祈っています。祈りの中で確信が与えられ、主にある勝利を得ています。

23:29 ダビデはそこから上って行って、エン・ゲディの要害に住んだ。

エン・ゲディは、死海のほとり、マサダよりも北にあるオアシスです。

3A 憐れみの勝利 24

1B 敢えて控える復讐 1-7

24:1 サウルがペリシテ人討伐から帰って来たとき、ダビデが今、エン・ゲディの荒野にいるということが知らされた。24:2 そこでサウルは、イスラエル全体から三千人の精鋭をえり抜いて、エエリムエリムの岩の東に、ダビデとその部下を捜しに出かけた。

ペリシテ人の討伐が終わりました。すると彼はすぐに三千人の精鋭をえり抜いています。相当、ダビデをしとめたいという思いが伝わってきます。けれども神がここで事態を 180 度転回させます。

24:3 彼が、道ばたの羊の群れの囲い場に来たとき、そこにほら穴があったので、サウルは用をたすためにその中にはいった。そのとき、ダビデとその部下は、そのほら穴の奥のほうにすわっていた。

羊の群れの囲い場として洞穴が使われていたので、かなり大きな洞穴だと考えられます。ダビデと部下は六百人いるので、彼らの多くが入ることのできるような大きなところでした。そこでサウルが用を足した、とあります。他の訳では一睡したということが書いてあります。そして洞穴は、入ったばかりだと目が慣れなくて奥の暗闇は見えませんが、ダビデたちは目が慣れていたので見えていました。

24:4 ダビデの部下はダビデに言った。「今こそ、主があなたに、『見よ。わたしはあなたの敵をあなたの手へ渡す。彼をあなたのようにせよ。』と言われた、その時です。」そこでダビデは立ち上がり、サウルの上着のすそを、こっそり切り取った。24:5 こうして後、ダビデは、サウルの上着のすそを切り取ったことについて心を痛めた。24:6 彼は部下に言った。「私が、主に逆らって、主に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油そそがれた方だから。」24:7 ダビデはこう言って部下を説き伏せ、彼らがサウルに襲いかかるのを許さなかった。サウルは、ほら穴から出て道を歩いて行った。

ダビデが「許さなかった」というのは、かなり抑制していたという意味合いがあるそうです。部下たちは何とかして手を下そうとしているのに、ダビデがかなり強く制しました。

2B 穏やかな叱責 8-15

24:8 その後、ダビデもほら穴から出て行き、サウルのうしろから呼びかけ、「王よ。」と言った。サウルがうしろを振り向くと、ダビデは地にひれ伏して、礼をした。

ダビデは、サウルに対して未だに大きな敬意を持っていました。地にひれ伏して礼をしています。

24:9 そしてダビデはサウルに言った。「あなたはなぜ、『ダビデがあなたに害を加えようとしている。』と言う人のうわさを信じられるのですか。」

誰も噂をしていません。サウルの被害妄想です。けれどもダビデはそう言うことはできず、他人が噂しているように表現しています。ダビデの心の優しさです。

24:10 実はきょう、いましがた、主があほら穴で私の手にあなたをお渡しになったのを、あなたにご覧になったのです。ある者はあなたを殺そうと言ったのですが、私は、あなたを思って、『私の主君に手を下すまい。あの方は主に油そそがれた方だから。』と申しました。24:11 わが父よ。どうか、私の手にあるあなたの上着のすそをよくご覧ください。私はあなたの上着のすそを切り取りましたが、あなたを殺しはしませんでした。それによって私に悪いこともそむきの罪もないことを、確かに認めてください。私はあなたに罪を犯さなかったのに、あなたは私のいのちを取ろうとつねねらっておられます。

ダビデはサウルの過ちを指摘しています。けれども、へりくだった心でその罪を責めています。ダビデは次の言葉を実践しています。「忍耐強く説けば、首領も納得する。柔らかな舌は骨を砕く。(箴言 25:15)」

24:12 どうか、主が、私とあなたの間をさばき、主が私の仇を、あなたに報いられますように。私はあなたを手にかけることはしません。24:13 昔のことわざにも、『悪は悪者から出る。』と言っているのです、私はあなたを手にかけることはしません。

とても大切な原則です。朝の礼拝で学びましたが、一つは、仇は主が行なわれることだ、ということ。人の領域にはありません。次に、悪に対して復讐することは、その悪に加担することになる、ということです。怒りをもって怒りで返したら、その人と同じ罪を行なうことになり、自分にも非があり、自分もその裁きを受けなければいけません。ゆえに悪に対しては善で報いるのです。「もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。(ローマ 12:20-21)」

24:14 イスラエルの王はだれを追って出て来られたのですか。あなたはだれを追いかけておられるのですか。それは死んだ犬のあとを追いかけて、一匹の蚤を追っておられるのにすぎません。

非常にへりくだった言い方です。イスラエルの王という者が、なぜこのようなつまらない者に対して戦っているのか？ということ。私達も大義のあることで戦いたいですね。戦いと言っても、神の真理のゆえに、正義のゆえに戦いは戦うべきですが、大きな益にならぬことで戦ってはいけません。

24:15 どうか主が、さばき人となり、私とあなたの間をさばき、私の訴えを取り上げて、これを弁護し、正しいさばきであなたの手から私を救ってくださいますように。」

ここまでダビデは、自分の手で復讐することを拒みました。まさに柔和な者であります。こんな王が果たしているでしょうか？ゆえに、ダビデには受け継ぐ地が与えられるのです。イスラエルの国が与えられるのです。

イエス様は、柔和な方でした。敵であるユダヤ人指導者に対して、徹底的にその逮捕の手に服されました。そして、彼らの告発に無言であられました。ピラトに対しても自分を擁護されることはありませんでした。そしりをご自分の身に受け、ご自分の父に魂を委ねられたのです。ゆえに、主はこの地上のすべてのものを御父によって嗣業の地として与えられました。私たちが徹底的に、柔和さの中に生きる時に、その後用意されているのは同じように豊かな嗣業の地なのです。

3B 涙の悔恨 16-22

24:16 ダビデがこのようにサウルに語り終えたとき、サウルは、「これはあなたの声なのか。わが子ダビデよ。」と言った。サウルは声をあげて泣いた。

先ほど話しましたね、サウルは自分の良心が痛んでいたもので、それでかえって気が狂ったようにダビデを追っていたのです。今、ダビデの柔和さによってサウルに悔恨の思いが与えられています。

24:17 そしてダビデに言った。「あなたは私より正しい。あなたは私に良くしてくれたのに、私はあなたに悪いうちをした。24:18 あなたが私に良いことをしていたことを、きょう、あなたは知らせてくれた。主が私をあなたの手に移されたのに、私を殺さなかったからだ。

サウルはダビデが自分に悪を図っていると言っていました、いや、良くしてくれた、と悟っています。

24:19 人が自分の敵を見つけたとき、無事にその敵を去らせるであろうか。あなたがきょう、私にしてくれた事の報いとして、主があなたに幸いを与えられるように。24:20 あなたが必ず王になり、あなたの手によってイスラエル王国が確立することを、私は今、確かに知った。

ここにはっきりと、サウルはダビデが王になることを分かっていることを表明しています。これを分かっていたからダビデを追い回していました。そしてサウル自身も、ダビデの中にある柔和さが神に選ばれた真実な王の資格であることを言い表しています。自分で自分を引き上げていないからです。自分が王になるのではなく、神がダビデを王にするからです。神が敵に仇を打ってくださり、ダビデを救い出してください。私たちキリスト者もどこまで自分が引き上げられることを主にしていたかか問われています。自分ではなく、主にさせていただくのです。ここに真の権威がありません。

24:21 さあ、主に掛けて私に誓ってくれ。私のあとの私の子孫を断たず、私の名を私の父の家から根絶やしにしないことを。」24:22 ダビデはこれをサウルに誓った。サウルは自分の家へ帰り、ダビデとその部下は要害へ上って行った。

当時の権力闘争では、一つの王家から他の王家に権力が移譲する時は、新しい王家が昔の王家の全てを打ち殺すのが常でした。サウルはそれをしないでほしいと約束してくれと願っています。ダビデは誓いましたが、確かに彼はそれを守りました。

そしてダビデは、要害へと戻っています。なぜか？和解したのではないか？そう思うかもしれませんが。けれどもダビデは知っていました。サウルがこれで悔い改めて心を入れ替えた訳ではない

のです。かつて、ヤコブがエサウと涙を流しながらの再会を見ましたが、その時もヤコブはエサウについていくことをせず、約束の地に向かいました。エサウが心を変えている訳ではなかったからです。

サウルは、根本のところでは心を入れかえていませんでした。またもやダビデを追い回します。なぜか？ 表明的な悔恨だからです。感情的に悔いているのですが、悔い改めていないのです。私たちはある人が大いに泣いている姿を見ると、神がその人の心に触れたのだ、これでその人は変えられると思うかもしれませんが、いいえ、その後の生活がまた戻ってしまっています。バプテスマのヨハネは、「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。(マタイ 3:8)」と言いました。確かに変わったとす
る実を結ばせなければいけないのです。

もし、私たちが毎週の礼拝において、「ここがいけない」と思ってその時は悔恨の思いで満たされたとしても、その悔恨から次に、具体的に悔い改めるための行動や計画がなければ、再びその罪に引き込まれてしまいます。もちろん私たちの肉は弱いですから、再び失敗してしまうかもしれません。けれども、「悔い改める」とは「思いを変える」ことです。方向を変えることです。再び同じ誘惑が来ても、それに対抗する心を神によって変えていただくかなければならないのです。

どうか今、静まって、祈りの時を持ちましょう。そして、ただ罪を悲しむだけでなく、悲しんでこれを捨てる勇気、またその行動と計画を持てるよう祈りましょう。